ARTSCAPE　形態と空間から考える公共空間

奨励賞

今野　広樹
（いまの ひろき）

千葉大学
工学部
建築学科

臨海副都心地区は新フェリーターミナルやカジノ誘致など、大規模な開発計画が練られている。

これから国際都市として開発地の進む地域において大切なのが質の高い公共空間の確保であり、かつ国際的に注目を集める前衛的なプロジェクトである。必ずしも機能ばかりが重要なわけではなく、人々の感性に何かを訴えかけるようなそんな文化的な公共空間として、私は波の形態をテーマにランドスケープと建築の融合を試みた。全体を覆うランドスケープは多様な形態とそれにより生み出される空間のシークエンスを、内部に入る美術館は従来の格式張った形式から脱却し、様々なランドスケープのアクティビティの一部として利用されることを考えた。

講　評

港湾・河川を抱える都市は海辺・水際に対して積極的に関わりを持つべきだ、という議論が勢いをもっていた時代があった。あれから 20 ～ 30 年を経て「ウォーターフロント」という言葉が死語となりつつある現在の東京だが、殺伐とした湾岸景観を見れば、かつての問題意識がいまも有効であることは明らかだ。その意味で、本作のテーマ設定と敷地選定は妥当である。ただし、作者の説明通りに、屋根伏の形状検討から空間計画を導き出したと捉えれば誤読となろう。本計画は、複合施設の設計と呼べる範囲に留まるものでなく、むしろ地区計画に近い。評価するべきは、この広大な敷地を通過・横断する人々の動きを、まるで水や風の流れを扱うかの如く、ダイナミックにデザインしようと試みた点にある。非常に大規模な計画であるため、細部の欠点を指摘するのは無粋か。しかしやはり「公共空間」の提案なのであるから、もっと人間的なアプローチに努めてもらいたい。たとえば、モジュールはより身体寸法に近づけるべきだし、個々の施設にはもっと繊細なディティールを与えるべきだろう。さらに欲を言えば、フェリーターミナルと繋がる部分も、同じ思想をもって設計してみて欲しかった。

（審査委員：矢野 裕之）